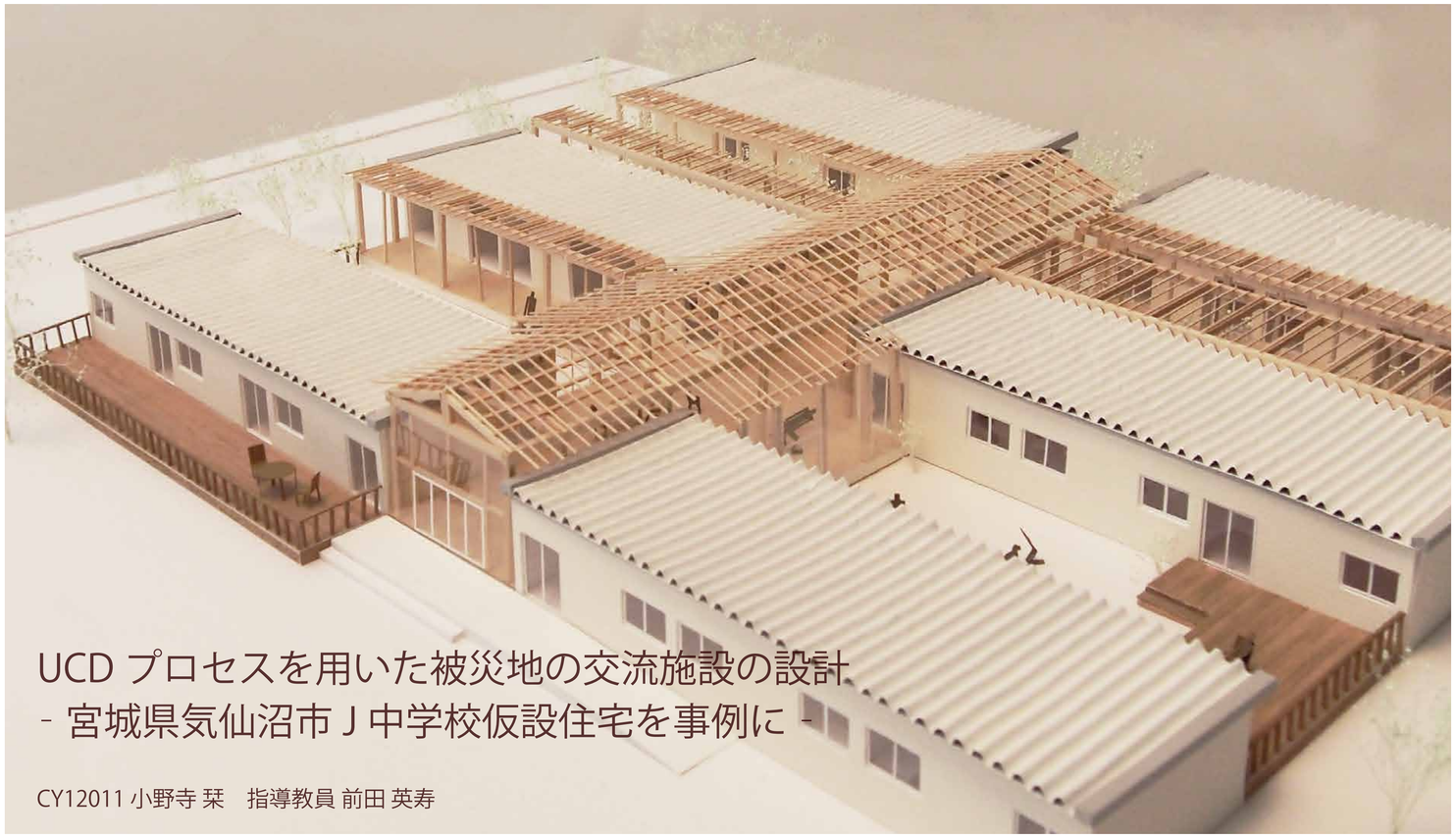


# UCD プロセスを用いた被災地の交流施設の設計
## - 宮城県気仙沼市 J 中学校仮設住宅を事例に -

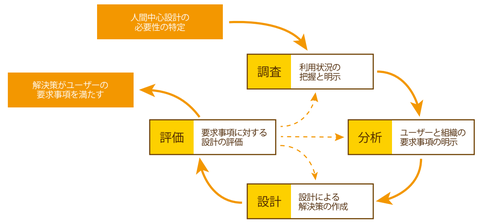
CY12011 小野寺 栞　指導教員 前田 英寿

## 背景とコンセプト

被災地では仮設住宅への移転など短期間で環境が大きく変化する。仮設住宅の入居は抽選で決まるため不慣れな人間関係がストレスになる。困難な状況下でコミュニティ形成を担う仕掛けとして交流施設を UCD プロセスを用いて設計する。

「イベントに頼らず交流のきっかけができ、それが継続する」をコンセプトとし、犬とのふれあいを介して他の利用者との交流のきっかけを生み出すことができる施設を提案する。

## UCD とは

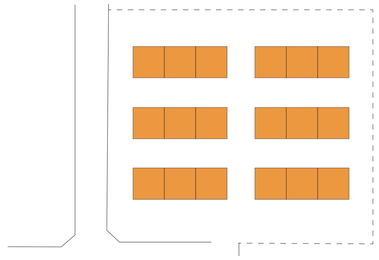



ユーザー中心設計（User Centered Design）とは使用者の視点を尊重し製品やサービスを計画する手法。

## 対象敷地

宮城県気仙沼市内 J 中学校住宅を対象
仮設住宅 70 世帯
2017 年 9 月撤去・復旧予定

## プレハブの活用



仮設住宅のプレハブユニットを再利用。一般的な仮設住宅 3 世帯分を並べ固定し、プレハブのつなぎ方を検討した。

## Process

### 現地調査

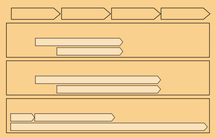
### ヒアリング調査

交流活動の種類と様態、その効果に着目し現地調査を行い、「交流のきっかけ」に着目し広く半構造化インタビューを行った。イベントがきっかけになっている。

**調査**

### ペルソナの設定

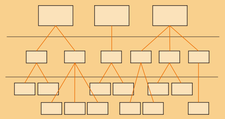
### ジャーニーマップ



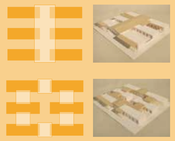
ペルソナを設定し、時系列で変化するユーザー理解を深めるため、カスタマージャーニーマップを作成した。そこから交流施設の供給の時期を決定した。

**分析**

### ラダーリング法



### 2 案設計



ラダーリング法でコンセプトを「イベントに頼らず交流のきっかけができ、それが継続する」とし犬とのふれあいで交流のきっかけを生む施設を提案する。増築の異なる 2 案を設計した。

**作成 1**

### ヒアリング調査

### 評価実験

犬とのふれあいでコンセプトが達成することを検証するためヒアリング調査を行い、達成することがわかった。評価実験は 8 名で行い、使いやすさを検証し 1 案に絞った。

**評価 1**

### 詳細設計

実験結果に基づき詳細設計を行うことで快適な空間を設計した。

**作成 2**

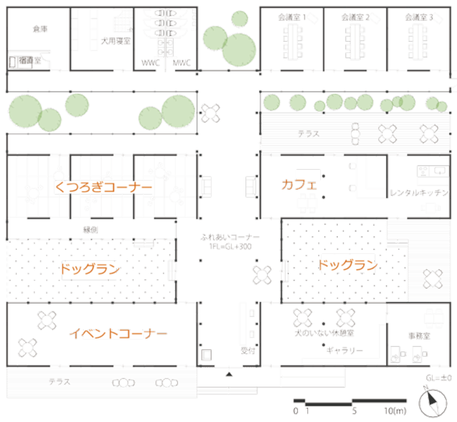
### 評価実験

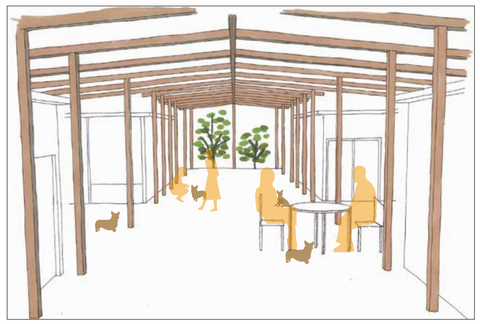
| | |
|---|---|
| | 4 |
| | 4 |
| | 4 |
| | 3 |
| | 3 |
| | 4 |
| | 2 |

4 段階で評価の結果、ユーザーの要求事項を満たすと判断した。

**評価 2**

## Design

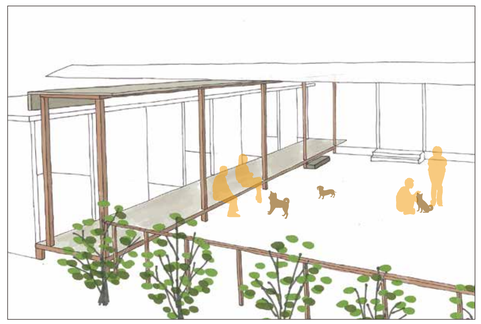


**中央の廊下**
増設部分を木造にすることでプレハブの単調な印象に温かみを与えた。また動線を中央に集中させ移動を容易にした。

**入口**
評価時に小さくわかりづらかった入り口は中央に大きなものを配置した。入り口から内部交流の様子がよく見える。

**イベントコーナー**
イベントコーナーや犬のいない休憩室からドッグランを眺めることができる。初めて利用する人をドッグランが迎える。



**縁側**
評価の課題を改善するため動線を整理し、縁側を設けた。ドッグランへ行きやすくなり、交流のきっかけを生む機会が増えた。